編集後記

広島の部落解放研究所では一九九八年の蓮如没後五百年の区切りの年を前に、二年程前から部会の研究例会のテーマを「蓮如論」に絞り討論を重ねてきました。

そのねらいは、単なる五百年前に没した歴史上の蓮如を論じるというのではなく、その視点は、今日の教団に属する私たち僧侶や門徒の意識の根を明らかにするということでもあります。東西本願寺では三月から「蓮如上人五百回遠忌法要」がつとまりますが、その法要に象徴される教団の現状を問うことでもあります。

「本願寺の再興」と「真宗の再興」という二つの課題を背負って出発した蓮如は、その生涯においてどのような問題に出会い、どう解決しようとしたのでしょうか。教団が大きくなるにつれて抜き差しならなくなる時の権力との問題、また大きくなった教団という組織の中に起こってくる矛盾、それらさまざまに生起する問題を蓮如はどう克服していこうとしたのか、どこまで克服出来たのか出来なかったのか。

蓮如を肯定的か否定的かどう評価するにしろ、蓮如が抱えた具体的な問題点は間違いなく現在の東西本願寺教団に繋がる源流であることは間違いありません。

その意味で蓮如をただ讃仰してことたれりということにもなりませんし、批判してすむというわけにもいきません。

蓮如が担った課題は、私自身の課題として、今の教団の課題としてどう受け止めるのか、そして私ならその課題をどう解決すべく行動するのか、教団としての課題の克服に向けてはどうすることがその道を開くことになるのか、それが明らかになることが「蓮如に学ぶ」ということであるように思います。そして、その学びこそが私たちにとって蓮如没後五百年の節目を真に意味あるものにすると考えます。

本当の学びは必ず新たな行動を生み出します。蓮如の五百年がすぎても何も変わらなかった、変わりはじめなかったというのでは、にぎやかなお祭りをしたことにしかなりません。何よりそんな法要では、蓮如がいかにあったにしろ、ダシされた蓮如に対して失礼でありましょう。

この本に載せられた論文が一方的に蓮如讃仰する人の論文だけでもありません、さりとて蓮如批判をする人だけの論文でもないという意図は、「何を学び、生み出すか」ということに視点をあてたためであります。対談も

あえて全く蓮如への評価の違う、稲城先生、玉光先生、福嶋先生、それぞれと小森部長が行うという形にさせて頂いたのもそこを狙ってであります。

それぞれの論稿・対談にその意図を読みとって頂ければと思います。

今回の広島部落解放研究所の宗教部会で紀要の第四号の特集号として出版するにあたり、広島から全国へという願いも込めて、研究会員以外の人たちにも、それぞれの「今、なぜ蓮如を論ずるのか」という視点で論稿をお願いし、沢山の論文をおよせいただきました。深くお礼申しあげます。

この一冊が、一人ひとりの真宗に生きる歩みの中で、蓮如没後五百年が意味あるものとなる機縁になることを願ってやみません。

（広島部落解放研究所
宗教部会事務局長　小武正教）